

【論文】

エミリ・ディキンソン—ニューイングランドの花

佐藤 江里子

序

生前、詩人として認められることもないまま、詩を書き続けていた19世紀アメリカの詩人エミリ・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86)。彼女が描く詩の世界にはニューイングランドの自然が溢れている。同じく19世紀に超絶主義を提唱した思想家ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) は、ディキンソンとは対照的にアメリカン・ルネサンスの中心人物として活躍していた。本稿では自然をテーマとしたディキンソンとエマソンの作品における共通点や相違点を分析し、ニューイングランドのふたりの詩人について論じる。

1. アメリカのうた

ニューイングランドでは、新大陸を目指し、ピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers) が上陸した17世紀以来、カルヴァニズム (Calvinism) に基づくピューリタン (Puritan) の社会が形成されてきた。だが18世紀にイギリスで本格化した産業革命の結果、都市部の近代化が進み、科学主義や新しい思想が次々と流入し、19世紀のアメリカは、ピューリタニズムの教義が大きく揺らいだ過渡的な時代である。

同じ頃、文学においてもヨーロッパからの伝統を脱却し、新しいアメリカのアイデンティティを確立しようという気運が高まり、アメリカン・ルネサンスが生まれる。エマソンは、アメリカン・ルネサンスの宣言とも言える

『自然論』 (*Nature*, 1836) の中で次のように述べている。

Our age is retrospective. It builds the sepulchres of the fathers. It writes biographies, histories, and criticism. The foregoing generations beheld God and nature face to face; we, through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? Why should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs? ¹

我々の時代は回顧的だ。先祖の墓を建てる。伝記、歴史、そして批評を書く。前の世代の人々は、神や自然を直接見た。我々は彼らの目をとおして神や自然を見ている。我々も宇宙との独自の関係をなぜ享受すべきではないのだろうか。我々は伝統ではなく、洞察の詩と哲学をなぜ持つべきではないのだろうか。彼らの歴史ではなく、我々への啓示による宗教をなぜ持つべきではないのだろうか。

エマソンは伝統に縛られることを止め、「神」や「自然」と直接向き合うことで、すべてを包括する「宇宙との独自の関係」を築くと述べる。そして『自然論』の冒頭にあるこの思想は、宇宙の本質、あるいは神と人間の内面は究極的に同質であり、神の存在を認識する手段は経験に先立つ直観であるという「超絶主義」(Transcendentalism)の基本的理念である。彼は超絶主義の思想のもと「洞察の詩と哲学」や「啓示による宗教」の必要性を説く。

『自然論』出版の翌年、1837年8月31日、ハーバード大学の講演でエマソンは新しい詩人の出現を強く求めている。

Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of

other lands, draws to a close. The millions that around us are rushing into life, cannot always be fed on the sere remains of foreign harvests. Events, actions arise, that must be sung, that will sing themselves. Who can doubt that poetry will revive and lead in a new age, as the star in the constellation Harp, which now flames in our zenith, astronomers announce, shall one day be the pole-star for a thousand years? ²

我々の依存の時代、他国の学問への長きにわたる徒弟教育は、終わりに近づいている。我々を取り囲む生き急いでいる数百万のものたちが、外国の収穫物の残りだけでいつも養われているわけではない。様々なできごと、行動が起き、それはまた、うたわれなければならないし、自分自身をうたうことになるだろう。誰が疑うというのか、詩が復活し、新たな時代の中で導くだろうことを。天文学者は宣言する。今、我々の頂点で燃えるように輝いている琴座の星が、ある日、これから数千年ものあいだの北極星となるはずだ。

これはのちに「アメリカの学者」(‘The American Scholar,’ 1837)として出版され、アメリカの知的独立宣言と言われている。植民地時代から独立戦争を経て、イギリスの経済的支配から独立した新しいアメリカには、精神的文化的な独立が必要であるとエマソンは宣言する。新しいアメリカの精神を確立するには、文学、それも詩が指針となるべきだと述べる。

イギリスからの伝統を切り捨て、まさにアメリカとしてのアイデンティティを形成する第一歩としてエマソンが求めたのは、他でもない詩人だ。それも新しい詩人でなければならない。このエマソンの期待に応えるように登場したのがウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) である。彼は『草の葉』(*Leaves of Grass*, 1855) を出版し、初めて口語自由詩 (free verse) の形式で「私自身のうた」(‘Song of Myself,’ 1891-92 edition) をうたう。

Song of Myself

I

I celebrate myself, and sing myself,
 And what I assume you shall assume,
 For every atom belonging to me as good belongs to you.

I loafe and invite my soul,
 I lean and loafe at my ease observing a spear of summer grass.

My tongue, every atom of my blood, form'd from this soil, this air,
 Born here of parents born here from parents the same, and their
 parents the same,
 I, now thirty-seven years old in perfect health begin,
 Hoping to cease not till death.

Creeds and schools in abeyance,
 Retiring back a while sufficed at what they are, but never forgotten,
 I harbor for good or bad, I permit to speak at every hazard,
 Nature without check with original energy.³

私自身のうた

私自身を私は祝う、そしてうたう
 私が思うことをあなたも思うはずだ
 よいものとして私に属しているあらゆる原子はあなたにも属している。

私は歩き回り、私の魂を招く

私は寄りかかり、のんきにまた歩き回り、夏草の穂先を観察する。

私の言葉、私の血の中にあるあらゆる原子、それはこの土壌、この大気
から形作られている

ここに両親から生まれ、その両親も同じようにここに生まれ、そのまた
両親も同じように生まれたのだ

私は今37歳で、完全に健康で始まる

死ぬまで止まらないことを願う。

信条や学派はおいておく

今の自分に満足ししばらく身を引くが決して忘れない

私はともかく避難してなにがなんでも話させる

止まることのない原始の力をもつ自然に

ホイットマンは、エドワード・テイラー (Edward Taylor, 1642-1729) などがその典型となるイギリスの詩的伝統ではなく、詩脚 (foot) や韻律 (meter) がない自由詩の形式を用いた。この斬新な形式のため、『草の葉』の初版は、世間から受け入れられなかった。しかし、ホイットマンから初版を送られたエマソンは、詩集を称賛し、その真価を認め、高く評価した。

ホイットマンは、同じ人間として「私」から「あなた」へと呼びかける。ここには存在としての深いつながりがある。だが、それだけではなく、アメリカの「土壌」や「大気」が創出した「私」という個の存在を際立たせる。そしてあくまでも「個」に重点を置きながら、「個」を含む「全体」という包括的な視点で描く。次の「私自身を私ほうたう」(‘One’s-Self I sing’) では、「個」としての「自我」、またはアメリカの「自我」を称賛し、肯定し、自由、平等など民主主義の理想を高らかにうたう。

One's-Self I sing

One's-Self I sing, a simple separate person,
 Yet utter the word Democratic, the word En-Masse.

Of physiology from top to toe I sing,
 Not physiognomy alone nor brain alone is worthy for the Muse,
 I say the Form complete is worthier far,
 The Female equally with the Male I sing.

Of Life immense in passion, pulse, and power,
 Cheerful, for freest action form'd under the laws divine,
 The Modern Man I sing.⁴

私自身を私ほうたう

「私自身」を私ほうたう、単純で独立した人間を
 だが「民主的」あるいは「大衆」という言葉を口にする。

頭から爪先まで人間の身体について私ほうたう
 骨相学だけあるいは脳だけが「詩神（ミューズ）」にとって価値がある
 わけではない

私は言う、完全な「かたち」こそがはるかに価値があるのだと
 「男性」と同じく「女性」について私ほうたう。

情熱、鼓動、力、計り知れない「生命（いのち）」を持った
 陽気で、最高に自由な行動をするために神の法則のもとにつくられた
 「新しい人間」を私ほうたう。

「人間の身体」についてうたうことだけが、「詩神（ミューズ）」のためではなく、そこに神や宇宙に匹敵する崇高な精神がなければ、「完全な「かたち」にはならないと言う。これこそが「神の法則のもとにつくられた「新しい人間」であり、またエマソンが求めた「新たな時代」の中でうたわれるべき「自分自身」に他ならない。ここには、人間の精神は神や宇宙に等しいと主張するエマソンの「超越主義」の思想が反映されている。ホイットマンの『草の葉』がエマソンの超絶主義の影響を受け、彼が理想とする新しいアメリカのうたであることは明白である。

同時代に生きたエミリ・ディキンソンは、生きているあいだは詩人として認められず、無名だったため、当時はホイットマンのように直接的にエマソンの影響を受けた詩人として認識されていなかった。しかし、南北戦争の前後、彼女にとって最も多くの詩を書いた1860年代の作品や残された手紙、または伝記などからエマソンの影響を受けたと言える。ディキンソンもまた「北極星」としてホイットマンとは違う「私自身のうた」をうたう。ディキンソンは新しいアメリカの詩人として、あらゆるものを「ニューイングランド流に」定義し、描き出している。

The Robin's my Criterion for Tune —
 Because I grow — where Robins do —
 But, were I Cuckoo born —
 I'd swear by him —
 The ode familiar — rules the Noon —
 The Buttercup's, my whim for Bloom —
 Because, we're Orchard sprung —
 But, were I Britain born,
 I'd Daisies spurn —
 None but the Nut — October fit —

Because — through dropping it,
 The Seasons flit — I'm taught —
 Without the Snow's Tableau
 Winter, were lie — to me —
 Because I see — New Englandly —
 The Queen, discerns like me —
 Provincially — (F256)

コマドリは私のうたの基準—
 コマドリが育つところに—私は育つから
 でも、もしカッコウに生まれたなら
 私はカッコウにかけて誓うだろう
 聞きなれた頌歌（オード）が—午後を支配する—
 キンポウゲはお気に入りの花—
 私たちは果樹園に生まれ育ったから—
 でももしイギリスに生まれたなら
 デイジーをはねのけるだろう—

木の実以外は—10月にしっくりこない—
 木の実が落ちて
 季節はいつも過ぎ去る—そう私は教えられたから—
 もし雪景色がなければ—
 私にとって—冬は嘘になるだろう—
 私は—ニューイングランド流に見ているから—
 女王も私のように見極める—
 イギリス流に—

この詩の「コマドリ」(“Robin”)と「デイジー（雛菊）」(“Daisy”)は、ア

マストの身近な自然を象徴すると同時に自己を表象する。このアメリカを象徴する「コマドリ」に対して「カッコウ」(“Cuckoo”)はイギリスの鳥である。「もしカッコウに生まれたなら」と仮定法を使い、イギリスの代表的な詩の形式である「頌歌(オード)」と「私のうた」を並べている。

ディキンソンはイギリスの作家や詩人を敬愛し、愛読していた。「私のうた」とイギリスの伝統的な「頌歌(オード)」、「私」と「女王」を対比させているが、ここには新しい独自のアメリカをうたうことへの、喜びと自信がある。ニューイングランド地方アマストの自然を賛美し、ここでしか見ることができない景色を誇りに思う。

彼女はしばしば、手紙や詩の中で、自己の表象として「デイジー(雛菊)」を使う。再び仮定法を使い、「もしイギリスに生まれたなら」そのデイジーを「はねのけるだろう」と断言することにより、ディキンソンのアメリカ人としての確固たるアイデンティティを逆説的に示している。ここには「アメリカの学者」の中でエマソンが予言した新しい詩人の「アメリカのうた」がある。

2. 魂の最高の瞬間

ディキンソンは、1849年頃、弁護士である父エドワード・ディキンソンの事務所で見習生として働いていたベンジャミン・ニュートン⁵から贈られ、エマソンの『詩集』(*Poems*, 1847)に出会う。彼女は詩だけでなく、彼のエッセイも読んでいた。そして1857年12月16日に、エマソンは講演のため、アマストを訪れ、ディキンソンの生家の隣にある兄オースティン・ディキンソン家の客となる⁶。このような伝記的事実はディキンソンの知的好奇心を刺激する非常に重要な出来事だったと言える。1862年に書いた次の詩にはエマソンの超絶主義を思わせる言葉や思想が多く見られる。

The Soul's Superior instants
Occur to Her—Alone—

When friend—and Earth's occasion
Have infinite withdrawn—

Or She— Herself—ascended
To too remote a Hight
For lower Recognition
Than Her Omnipotent—

This mortal Abolition
Is seldom—but as fair
As Apparition—subject
To Autocratic Air

Eternity's disclosure
To favorites—a few—
Of the Colossal substance
Of Immortality (F630)

魂の最高の瞬間は
彼女のもとにやってくる—ひとりのときに—
友人や—地上の機会が
無限に遠ざかったときに—

あるいは魂—それ自身が—昇りつめてしまったときに
あまりにも遠く高いところまで
その魂の全知全能よりも
低い認識のために—

このような現世の放棄は
 めったに一幽霊と同じくらい
 美しいが一独裁的な態度には
 ならない

永遠の出現
 ごくわずかな一神のお気に入りのものたちだけに—
 それは不滅の
 巨大な内容

「友人や一地上の機会が／無限に遠ざかったとき」や「魂」が「あまりにも遠く高いところまで」「昇りつめてしまったときに」訪れる「魂の最高の瞬間」をうたう。この詩における自己の魂の経験は、エマソンが『自然論』で述べている「孤独になるためには社会からだけでなく自分の部屋からも身を引く必要がある。誰ひとり私と一緒にいなくても、読んだり書いたりしているあいだは、私は孤独ではない」⁷に呼応する。さらにこの瞬間、魂はみずからを「全知全能」とし、それ以外の認識を低いものとし拒絶する。この「現世の放棄」(“mortal Abolition”)は、人間の「独裁的な態度」をすでに超越している。「幽霊」(“Apparition”)は実体のない現実世界を意味する。「同じくらい美しい」と現実を決して否定することなく、現世を放棄したものにだけ見えるものがあると言う。それが「ごくわずかな一神のお気に入りのものたちだけに—」見ることが許された「永遠」(“Eternity”)である。この「永遠」は神の顕現 (Epiphany) であり、このようなディキンソンの神のとらえ方は、教会が説く伝統的なキリスト教の教義に賛同できず牧師を辞め、自己の内面世界に神や宇宙を見出した、エマソンの超絶主義の思想と一致する。

ディキンソンが生涯信仰告白をしなかったことは周知の事実であるが、彼女は詩を書くというエクリチュールにおいて、エマソンの言う神との「独

自な関係」を築く。これはエマスンが定義する「歴史」ではなく「啓示の宗教」であり、彼女は日常の中で「魂の最高の瞬間」を経験し、「神」をとらえようとする。ディキンソンは自然の中でも「魂の最高の瞬間」を体感する。

「教会に行つて安息日を守る人もいる」(“Some keep the Sabbath going to Church—” F236) では、教会に行くのではなく「私は家において安息日を守る—／聖歌隊にはボボリンク(コメクイドリ)／教会の丸天井には果樹園」と自然の中で過ごす「安息日」の喜びが描かれている。そして「安息日」に聖職者たちが着る「白衣」(“Surplice”)ではなく、「私は翼を身につけるだけ」(“I, just wear my Wings”)と言う。「最終的に天国へ行くのではなく／初めからずっと天国に行っている」と言い詩を閉じている。身近なアマストの自然が、地上の「天国」として具象化され、この自然との一体感の喜びが「魂の最高の瞬間」となる。また、「ミツバチ」(“Bee”)の視点で描く、ディキンソンの「私は醸造されたことがない美酒を飲む」(“I taste a liquor never brewed—,” F207)の「露の放蕩者」(“Debauchee of Dew”)にたとえられた「ミツバチ」(“Bee”)は、エマソンの「マルハナバチ」(“The Humble-Bee”)を思わせる。

ディキンソンにとって唯一の文学上の師であり、生涯文通を続けた、批評家のトーマス・ヒギンソン(Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911)は、外出せずひとりで詩を書いているディキンソンをボストンで開かれる詩人たちの集まりに誘っている。

You must come down to Boston sometimes? All ladies do. I wonder if it would be possible to lure you [to] the meetings on the 3^d Monday of every month at Mrs. [Sa]rgent's 13 Chestnut St. at 10 am—when somebody reads [a] paper & others talk or listen. Next Monday Mr. Emerson [rea]ds & then at 3 1/2 P. M. there is a meeting of the Woman's [Cl]ub at 3 Tremont Place, where I read a paper on the [Gre]

ek goddesses. (from T.W. Higginson, L330a, 11 May 1869)

ボストンへは時々お出かけするのでしょうか？ 女性たちはみんなそうします。毎月第3月曜日に、チェストナット街13番地のサージェント夫人宅で、午前10時に開かれる会にあなたをお誘いできればと思っています—誰かが論文を読み、他の人たちは話したり聞いたりします。次の月曜にエマソン氏が論文を読み、それから午後3時半にトレモント・ブレイス3番地で、婦人クラブの会があります。そこで私はギリシアの女神についての論文を読みます。

ディキンソンはヒギンソンからの誘いを丁重に断っている。彼女はアメリカン・ルネサンスの中心人物で超絶主義の提唱者、そして詩集やエッセイを読み、作品においても影響を受けたと言えるエマソンとの面会の機会を二度も見送っている。接点を持てたにもかかわらず、それを辞退したことからディキンソンにとっては面会することがそれほど重要ではなかったと言える。このヒギンソンからの手紙の返事の中で、ディキンソンは、「手紙はいつも私にとって不滅のように感じます。なぜならそれは、ただ単に肉体のある友人ではなく心そのものだからです。私たちが話をするとき、態度や言葉の抑揚が助けになりますが、思考においてはひとり歩きする霊力があるように思えます—」(“A Letter always feels to me like immortality because it is the/ mind alone without corporeal friend. Indebted in our talk to/ attitude and accent, there seems a spectral power in thought that/ walks alone—,” L330, June 1869) と述べている。彼女は会わないことによって、エマソンを「肉体のある友人」ではなく、その魂を「心そのもの」として「不滅」にしたのである。

3. ロドーラとリンドウ

「詩が復活し、新たなる時代の中で、導く」「北極星」になると宣言してか

ら10年後の1847年にエマソンは『詩集』を出版している。思想家として知られているが、エマソン自身、詩人として新しいアメリカのアイデンティティを定義する。

The Rhodora

On Being Asked, whence Is the Flower?

In May, when sea-winds pierced our solitudes,
 I found the fresh Rhodora in the woods,
 Spreading its leafless blooms in a damp nook,
 To please the desert and the sluggish brook.
 The purple petals, fallen in the pool,
 Made the black water with their beauty gay;
 Here might the red-bird come his plumes to cool,
 And court the flower that cheapens his array.
 Rhodora! if the sages ask thee why
 This charm is wasted on the earth and sky,
 Tell them, dear, that, if eyes were made for seeing,
 Then Beauty is its own excuse for being:
 Why thou wert there, O rival of the rose!
 I never thought to ask, I never knew;
 But, in my simple ignorance, suppose
 The self-same Power that brought me there brought you.⁸

ロドーラ

その花はどこから来たのかとたずねられて

五月、海風が私たちの荒野を吹き抜けるとき

私は森で咲いたばかりのロドーラの花を見つけた
 湿っぽく人目につかない場所で葉のない花を広げながら
 その見捨てられた場所やゆるやかに流れる小川を喜ばせている。
 みずたまりに落ちた紫色の花びらが
 黒い水を美しい華やかさで彩った。
 赤い鳥がその羽を冷やすためにここに来るかもしれない
 そして彼の衣装が見劣りするそのロドーラの花に求愛するかもしれない。
 ロドーラ！賢者たちがあなたにたずねたら
 なぜこの魅力が地上でも天上でも無駄にされるのかと
 愛しいあなた、彼らに告げなさい、もし目が見るために作られているの
 なら、
 「美」はそれ自身の存在理由であると。
 なぜあなたはそこにいたのか、おお、バラのライバル！
 私はたずねようとは決して思わなかった、そして知らなかった。
 単純な無知だが、こう思う、
 私をそこへ連れて来たのとまさに同じ「力」があなたを地上に咲かせた
 のだと。

この詩の「私」は、「森」の中の「湿っぽく人目につかない場所」で人知れず咲く「ロドーラの花」を見つかる。「見捨てられた場所」や「ゆるやかに流れる小川を喜ばせている」だけのその花は、散ってもなお「紫色の花びら」で水たまりの「黒い水」を彩り、水辺にやってきた「赤い鳥」(“the red-bird”)の羽は、「ロドーラの花」のそばではかすんでしまう。この「赤い鳥」は、「ショウジョウコウカンチョウ（猩々紅冠鳥）」(“cardinal”)を連想させる。これはカトリックの枢機卿を象徴し、この「赤い鳥」が「彼の衣装が見劣りするそのロドーラの花に求愛するかもしれない」とある。ここでエマソンは、「赤い鳥」よりも「ロドーラの花」の優位性を暗示している。

この詩では、森の「緑」、花びらの「紫」、水たまりの「黒」、鳥の「赤」

と鮮やかな色で視覚的に自然を描写している。特に、「ロドーラの花」の紫は、最高位を表す高貴な色として認識されており、この観点からもエマソンは野生の「ロドーラの花」を非常に価値あるものとしてとらえている。

9行目で「ロドーラ！」と呼びかけ、「あなた」(“thee,” “thou”) で受ける。更に11行目「愛しいあなた」(“dear”) や13行目「おお」(“O”) と呼びかけ、「バラのライバル」(“rival of the rose”) にたとえている。詩人エマソンは、ロマン派の手法である頓呼法と擬人法を使い、「私」が「ロドーラの花」に直接呼びかけることで自然に接近し、親近感と一体感を表現し、また、自然という対象に自己の感情を読み込んでいる。

森の中で見つけた「ロドーラの花」を観察しながら、誰にも気づかれず、その存在を知られることなく美しく咲く花の姿に、人間の存在や美についてまで深く瞑想する。見られるために咲くのではなく、咲くことそのものが「存在理由」であり、「美」であることをエマソンは主張する。誰にも見られずに咲く野生の「ロドーラの花」は、「バラ」の美しさに匹敵する。しかし、人間の手が加えられることもなく、鑑賞用として栽培されたわけでない野生の花には、本来備わっている生命力と美しさがあり、それは自然という調和の中で、生命を魅了する。

エマソンは、見られるために存在する客体としての「美」ではなく、「ロドーラの花」を「地上に咲かせた」「力」が備わっている存在そのもの、その主体性を「美」と定義する。そしてイギリスを象徴する「バラ」と、森の中の野生の「ロドーラの花」を対比させることで、アメリカを象徴するのにふさわしいものとして「ロドーラの花」を描いている。

ディキンソンは詩や手紙の中で非常に多く「花」に言及している。「花」はディキンソンにおいて最も身近な自然であり、また「鳥」と同様に自己を表象する重要なメタファーである。次の詩は「リンドウ」(“Gentian”) と「バラ」(“Rose”) についてうたう。

God made a little Gentian—

It tried—to be a Rose—
And failed—and all the Summer laughed—
But just before the Snows

There rose a Purple Creature—
That ravished all the Hill—
And Summer hid her Forehead—
And Mockery—was still—

The Frosts were her condition—
The Tyrian would not come
Until the North—invoke it—
Creator—Shall I—bloom? (F520)

神は小さなリンドウを創った—
りんどうは—バラになろうとした—
そしてなれなかった—夏はずっと笑っていた—
でもちょうど雪の季節が来る前に

紫色の花が萌え出し—
すべての丘の心を奪った—
そして夏はその額を隠し—
嘲笑は—消えた—

霜はリンドウに必要な条件—
その貝紫色は生まれないだろう
北風が—呼び起こすまでは
創造主よ—私は咲くでしょうか？

第1連で「バラ」になろうとしてなれなかった「小さなリンドウ」は、「夏」に嘲笑される。ディキンソンは、擬人法を使い季節の移り変わりや自然を描く。彼女の作品において、夏は「歓び」「不滅」「永遠」「美」を表すメタファーとして変容する。この短い詩行「夏はずっと笑っていた」には、「リンドウ」の深い絶望がある。しかし、第2連で、夏が過ぎ「リンドウ」の「紫色の花」が咲く様子が描かれている。「最高の瞬間」を迎えた「リンドウ」は「丘の心」を奪い、「リンドウ」を笑った「夏」は恥ずかしさで顔を隠す。人間から見たら厳しい「霜」や「北風」も「リンドウ」が美しい「貝紫色」で咲くためには「必要な条件」である。

ディキンソンの「リンドウ」は、森の奥で誰かに見られるためではなく、バラに匹敵する美しさで人知れず咲くエマソンの「ロドーラ」と同様に、存在そのものが美となる。「リンドウ」が「バラ」になる必要はないことを「北風が一呼び起こす」「リンドウ」の「貝紫色」が証明している。ディキンソンは最後に「私」と「リンドウ」を重ね、私もこの「リンドウ」のように「咲くでしょうか？」と「神」に問いかけている。ここでは「創造主」である「神」に問いかける形式を使い、ディキンソンは「バラ」ではなく、「リンドウ」として咲くことを自己の信念を貫く生き方のメタファーとして描いている。

結

How happy is the little Stone
 That rambles in the Road alone,
 And doesn't care about Careers
 And Exigencies never fears—
 Whose Coat of elemental Brown
 A passing Universe put on,
 And independent as the sun,
 Associates or glows alone,

Fulfilling absolute Decree
In casual simplicity— (F1570)

なんて幸せなんだろう その小石は
道にひとりどころがっている
経歴など気にせずに
突然の危険を決して恐れることもない—
その自然のままの茶色の上衣は
通りすぎてゆく宇宙が着せた
太陽のように独立して
ひとりで楽しみひとりで輝く
絶対的な法則に従っている
何気ない無邪気さで—

ディキンソンは誰も気にとめないような「小石」に、宇宙の一部として存在するものという認識を与えている。その模様には悠久の時間が刻まれ、何も求めず、「道にひとりどころがっている」鉱物は宇宙の「絶対的な法則」に従っている。ディキンソンは観察者である詩人として、人間の根源的な苦悩から解き放たれた鉱物である「小石」に理想的な人間の「生き方」を重ねる。エマソンが存在そのものが「美」であると定義した「ロドーラの花」に生命の強さと美しさを見るように、ディキンソンは存在について思考する。

「バラ」ではなく「リンドウ」として生きることを選択したディキンソンの人生を貫いていたものは「自己信頼」(“self-reliance”)の精神に他ならない。エマソンは超絶主義の思想に基づき、自然の中でその一体感や歓びという側面に目を向けていた。しかし、ディキンソンは彼の超絶主義に影響を受け、インスピレーションを得て、多くの詩を書いたが、それだけではなく自然の計り知れない側面を認識し、自然を「幽霊屋敷」にたとえている。彼女は自然との断絶を「死」のメタファーで表現し、時には懐疑的に死を含めた

ものとして自然への認識を深めようとする。このようにディキンソンは、この自然のとらえ方においてエマソンとの相違点はあるが、「誰でもない」詩人として、最後まで詩を書き続けることができたのは、エマソンが説く「自己信頼」の精神があるからだと言える。

このアメリカン・ルネサンスにおける「自己信頼」の土壌が、「ロドーラ」と「リンドウ」というニューイングランドの花を咲かせたのである。

〔注〕

本稿におけるディキンソンの詩は Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition. 3 vols.* Ed. Franklin, R. W. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998. からの引用とし、F と略す。F のあとの数字は詩の番号を表す。また、手紙は Dickinson, Emily. *The Letter of Emily Dickinson. 3 vols.* Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP, 1958. からの引用とし、L と略す。L のあとの数字は手紙の番号を表す。

本稿における詩と手紙の和訳はすべて筆者による。

¹ Emerson, Ralph Waldo. *Nature and Selected Essays.* Ed. with an Introduction by Ziff, Larzer. Penguin Books, 2003, p.35. 和訳は筆者による。

² Ibid., pp.83-84. 和訳は筆者による。

³ Whitman, Walt. *Leaves of Grass: The Complete 1855 and 1891-92 Editions.* with an Introduction by Hollander, John. Library of America Paperback Classics, 1992, p.188. 和訳は筆者による。

⁴ Ibid., p.165. 和訳は筆者による。

⁵ ベンジャミン・ニュートンは、エマソンの他にもエミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) など様々な文学作品を十代のディキンソンに紹介し、彼女に詩を書くことを勧めた。ニュートンは肺結核のため 32 歳で早逝するが、最後までディキンソンに詩人になるようにと励ました。ディキンソンはヒギンソンへの手紙の中でニュートンについて「私に不滅を教えてくれた友人がいた」(“I had a friend, who taught me Immortality,” L261, 25 April 1862) と述べた。

⁶ ディキンソンが兄の家の客として訪問したエマソンと会ったという証拠はなく、おそらく会っていないと思われる。義姉スーザン・ディキンソンは、「彼のトランセンデンタルな腕によりかかって、うっとりとして家まで一緒に歩いた」(新

倉俊一『エミリー・ディキンソン不在の肖像』大修館書店、1989年、p.17)と述べている。

⁷ Emerson, Ralph Waldo. *Nature and Selected Essays: 'Nature.'* Ed. with an Introduction by Ziff, Larzer. Penguin Books, 2003, p.37. 和訳は筆者による。

⁸ Emerson, Ralph Waldo. *Selections from Ralph Waldo Emerson.* Ed. by Whicher, Stephen E., Boston, Houghton Mifflin Company, 1957, pp.412-413. 和訳は筆者による。

文献リスト

テキスト

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition. 3 vols.* Ed. Franklin, R. W. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.

Dickinson, Emily. *The Letter of Emily Dickinson. 3 vols.* Eds. Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard UP, 1958.

Emerson, Ralph Waldo. *Selections from Ralph Waldo Emerson.* Ed. by Whicher, Stephen E., Boston, Houghton Mifflin Company, 1957

参考文献

Eberwein, Jane Donahue. ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia.* Westport, Connecticut, London: Greenwood Press, 1998.

Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson.* Cambridge: Harvard UP, 2004.

———. *The passion of Emily Dickinson.* Cambridge: Harvard UP, 1992.

Johnson, Thomas H.. *Emily Dickinson: An Interpretive Biography.* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1963.

Miller, Cristanne. *Emily Dickinson A Poet's Grammar.* Cambridge, Mass and London, England: Harvard UP, 1987.

新倉俊一『エミリー・ディキンソン 不在の肖像』大修館書店、1989年。

新倉俊一／鶴野ひろ子訳『エミリー・ディキンソン評伝』国文社、1985年。

ラルフ・ウォルドー・エマソン著 小田敦子／武田雅子／野田明／藤田佳子訳『エマソン詩選』未来社、2016年。

Emily Dickinson—Flowers Blooming in New England

Eriko SATO

ABSTRACT

In the 19th century American poet Emily Dickinson continued to write her poems without being recognized as a poet during her lifetime. The world of poetry she depicts is full of the nature of New England. Ralph Waldo Emerson, philosopher, thinker of Transcendentalism, and poet, was a central figure in the American Renaissance in contrast to Dickinson. This paper analyzes the similarities and differences in the works of the two poets of New England especially on the theme of nature.

Both Dickinson and Emerson have a command of metaphor for “self-reliance” by using the image of flowers, “Rhodora,” “Gentian,” and “Rose.” She clothes her thought of “self-reliance” he advocated in a singular and symbolic metaphor of “Gentian.” Choosing to live as “Gentian” rather than “Rose,” Dickinson never stopped writing her poems in spite of an unknown poet.

Dickinson is influenced and inspired by Emerson, but she expresses discordance with nature in her works. With regard to this point she is different from his view of nature, yet she persists in her belief, the spirit of “self-reliance” which Emerson defined in his essays on Transcendentalism.